

■江原素六とその周辺 74

江原素六と木村久一

■シリーズ 沼津兵学校とその人材 115

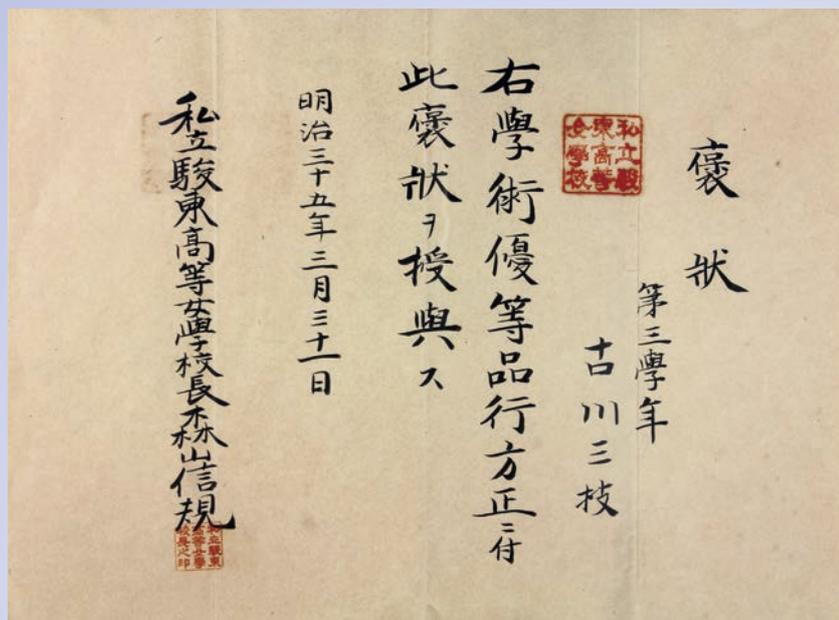
沼津兵学校に学んだ主従一浅野辰夫と佐々木慎思郎

■博物館実習と館外展示の報告

二〇二五年一〇月

通巻163号

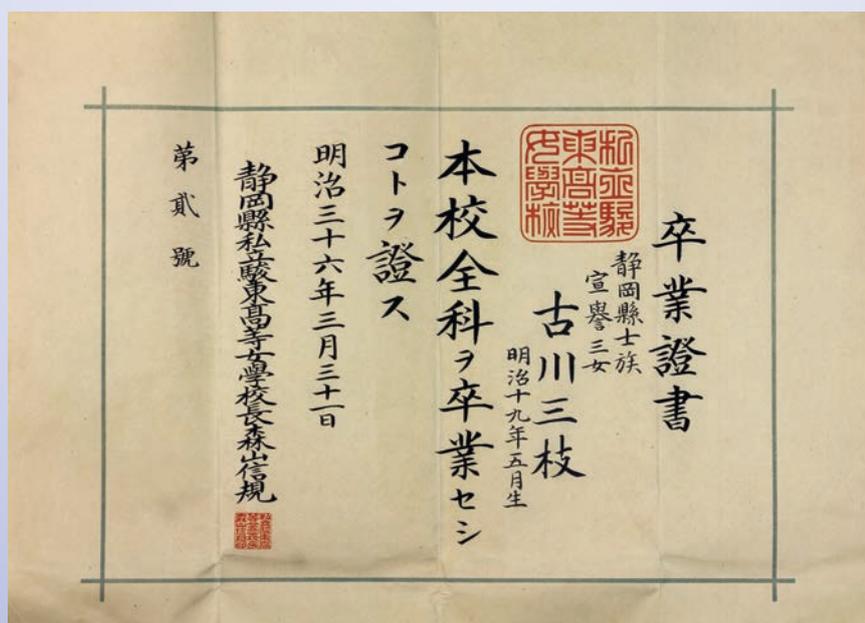
沼津市明治史料館通信



私立駿東高等女学校の褒状

明治35年（1902）

井上文男氏寄贈・当館蔵



私立駿東高等女学校の卒業証書

明治36年（1903）

井上文男氏寄贈・当館蔵

校長森山信規は、江原素六の親友・政治家星亨の書生だった前歴を持ち、『新旧社会主義』（1894年、博文館）という訳書もある。証書の受領者古川三枝は、沼津兵学校卒業生出身の陸軍中将古川宣譽の三女。

# 江原素六とその周辺 74 江原素六と木村久一

晩年の江原に関わる新聞記事として、以下のようなものがある。

## 木村久一氏公判

元早稲田大学講師文学士木村久一大学評論編輯人信定瀧太郎氏に係る過激派宣伝ビラを謄写配布した不敬事件第二回控訴公判は廿二日午前十時半東京控訴院刑事第二部で開かれたが各弁護士出廷直ぐと公開禁止され証人貴族院議員江原素六翁を喚問し証人岡田哲蔵氏を出廷させる為次回は十二月八日開廷に決して午後零時閉廷

〔『読売新聞』大正九年一月二三日〕

さて、この木村久一（一八八三〜一九七七）という人物のことである。山形県（現上市市）に生まれた彼は、東北学院を卒業した後、明治四二年（一九〇九）東京帝国大学文科哲学科に進学、心理学を専攻した。大正二年（一九一三）に卒業後は、江原が校長をつとめる麻布中学校に就職し英語を教えた。江原素六が残した資料には、版心に「麻布中学校用紙」と印刷された野紙に記された、下記のような木村の履歴書がある（資料番号W—f—27）。

## 木村久一ト麻布中学校トノ関係

### 木村久一

一大正元年十一月就職（大学卒業年）

一大正三年一月ヨリ同三月迄三ヶ月間沼津駿東女学校

校行

一大正三年四月復職

一大正八年三月辞職

筆跡から、右の書類は江原の自筆と思われる。ただし、反古として習字の練習に使われているので、

あくまで下書きだったのであろう。大学の卒業年には齟齬があるが、沼津の駿東高等女学校への赴任期間は、静岡県立沼津西高等学校側の記録とも一致する（『高女・西高九十年史』、一九九〇年、一四七頁）。ただし、高校側の記録では単なる教諭とされているが、木村が「臨時校長」として駿東高女に赴任したとする文献もある（福家崇洋「大正デモクラシー下の心理改造——一九一〇年代における木村久一の軌跡と思想——」『社会思想史研究』第三四号、二〇一〇年）。当時、同校では校長森山信規の辞職・後任問題が起きていたので、そのために江原が木村を送り込んだのであろう。

沼津の学校での木村の授業ぶりを、たまたま參觀した江原が「これは人物だ」と感心し、麻布中学校に招聘したのだという生徒の証言もあるが（片山巍「麻布学園と私」なつかしい先生方の追憶——『麻布学園の一〇〇年 第二巻 文集』、一九九五年）、逆であらう。

短期間で東京へもどった木村は、その後、聖学院神学部・青山女学院・早稲田大学などで教鞭をとったほか、大正六年（一九一七）には星島二郎らが創刊した雑誌『大学評論』の同人となり（伊藤隆「大正期「革新」派の成立」、一九七八年、塙書房）、大正デモクラシー期の社会評論に筆をふるった。同七年（一九一八）には吉野作造らによる黎明会の結成にも参加、さらに早稲田の学生を中心とした建設者同盟に加わるなど、次第に社会主義への傾斜を強めていった。麻布中の生徒出身者には、「教師の中にもれっきとした社会主義者木村久一が英語を教え」て

いたと回想している者もある（橋本重遠「七十余年前の麻布中学と私」、前掲『麻布学園の一〇〇年 第二巻 文集』）。

そして、『大学評論』の編輯者信定瀧太郎らがロシア過激派の宣伝文を印刷・配布したという嫌疑にからみ、同誌の主筆だった木村も大正九年（一九二〇）六月、収監されることになったのである。その宣伝文には、「世界の無産者団結せよ」のほか、「ミカドを倒せ」といった文言があったことから、不敬罪に問われた。七月に懲役刑を言い渡され、控訴や上告を繰り返したが、翌年には東京監獄に送られた。江原が証人として出廷したのは、大審院への上告前のことだったと思われる。木村にとって不利な証言はしなかったであろう。

出獄後の木村は、ジャーナリズムの一線からは身を引き、昭和六年（一九三一）に平凡社に入社、編集長として『世界大百科事典』の作成に注力した。戦後も『小天地』、『時代』といった雑誌の編集にあたり、平凡社の顧問をつとめていた。

もともと木村は東北学院の出身でクリスチャンだったことから、江原素六との関係もその点から生じたのであろう。江原葬儀時の資料として、木村の名刺と香奠包が現存するので、弔問に訪れたようである。なお、木村の妻は麻布中学校の第二代校長清水由松の娘であり、麻布中学校勤務時代には、まだ教頭だった清水の家に同居していたこともあったらしい（片木健一「麻布中に学ぶ」、前掲『麻布学園の一〇〇年 第二巻 文集』）。

（樋口雄彦）

## 沼津兵学校に学んだ主従

— 浅野辰夫と佐々木慎思郎 —

大名に家臣（藩士）がいるように、旗本にも家臣がいた。徳川將軍から見れば、家来の家来、つまり陪臣である。家臣というより少数の召使・使用人がいるにすぎなかった小祿の旗本とは違い、大身の旗本には先祖代々仕える譜代の家臣が少なからずいた。

維新後、徳川家の駿河移封に随従することになった際、旗本の多くはそれまで召し抱えていた家臣を解職し、自身と家族だけで移住した例がほとんどだったと思われるが、中には、五〇〇〇石の蟻川家のように家来二名とその家族、および下男・下女、計十余名を引き連れて来たケースもあった。静岡では自分が生活していくだけでも大変だったはずであるが、持参した財産があったため、多くの家臣を食わせることができたのであろうか。

ところで、沼津兵学校の生徒には、元主君と元家臣という関係性を持つ、ある二人の人物がいた。二〇〇〇石の旗本で目付・神奈川奉行・外国奉行・陸軍奉行などをつとめた浅野氏祐（次郎八・伊賀守・

美作守、一八三四〜一九〇〇）の子辰夫と、浅野家の用人をつとめた佐々木文雄（直右衛門・勝繼、一八一九〜九五）の子慎思郎である。

佐々木慎思郎（諱は勝吉、一八四八〜一九二三）は、幕末、弟勇之助や主君の子浅野辰夫らとともに旗本藤沢次謙（浅野氏祐の妹婿）に算術を習い、幕府の海軍所で学んだ。また、主君浅野氏祐の供をして京都に赴いたこともあった。元治元年（一八六四）一〇月一三日には江戸芝新銭座の大小砲習練場に入

門し、浅野辰之助家来の立場で江川太郎左衛門門下にて砲術を学んでいる（『江川英龍公を広める会』五十音順の部）、二〇二三年、江川英龍公を広める会。そして、維新後は浅野家の「附籍」として駿河に移住し、沼津兵学校第一期資業生となったのである。西周が明治政府に出仕し沼津を離れると、それに同行し、東京で西が開いた育英塾に入り、塾頭となった。明治六社には客員として参加した。陸軍省の文官などを経て、後年は二十銀行頭取、第一銀行・東京海上保険会社取締役などをつとめ、実業家として成功した。「温厚篤実にして思慮頗る周密な人で、一言一行苟もせず、日露戦後新会社が雨後の筍の如く簇生した際に、発起人中に慎思郎氏の署名した新会社の為に信用を増した程であった」（『奮闘活歴血涙のあと』、実業之日本社、一九二五年）とまで評された。

維新の際、慎思郎を除く佐々木家の人々は東京に残り、文雄は次男勇之助とともに商売を始めた。兄慎思郎に代わって文雄の跡を継いだ佐々木勇之助（一八五四〜一九四三）は、大蔵省を経て第一国立銀行に入り、渋沢栄一に見込まれ、お雇いイギリス人シャンドに師事して洋式簿記を身に付ける。やがて渋沢の片腕となり、大正五年（一九一六）には第一銀行の第二頭取に就任するなど、兄と同様に実業界で活躍することとなった。

そもそも佐々木家は山城国の郷士で、享保年間に江戸に出て、郡上藩金森氏や旗本酒井氏に仕えた後、浅野家の家臣になったという家だった。文雄は五代目で、浅野家に仕えたのはその父勝重の代からだった。近世後期になると、高祿の旗本であっても、知行所の名主などをにわかに取り立て家臣にするなど、百姓・町人出身者を雇用する場合が少なくなかったが、佐々木家はそうではなかった。とはいえ明治以後、旗本家臣の多くは士族にはなれず、慎思郎も勇之助も戸籍上は平民だった。静岡藩における慎思郎の身分も、正式な藩士ではなかったのであろう。佐々木文雄・勇之助家に伝来した多くの資料は、現在、文京区立文京ふるさと歴史館に寄贈されている（『文京ふるさと歴史館年報』第二三三号、二〇二〇年）。



浅野氏祐

『旧幕府』第4巻第7巻所載



浅野辰夫

佐々木恭之助氏提供



佐々木慎思郎

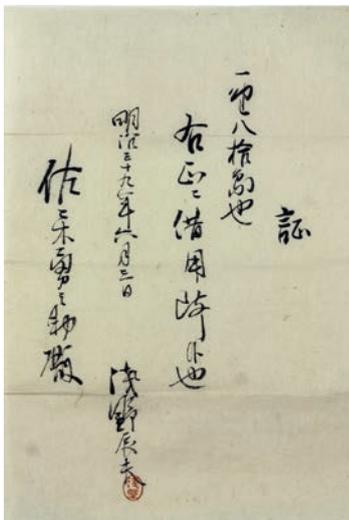
1918年撮影・古稀記念  
佐々木恭之助氏寄贈

沼津兵学校頭取西周の妻升子の日記に、「今日より佐々木慎思郎君来る事、浅野様、御子息御頼ミ有る、御承知」(明治二年三月二日条)、「今日、浅野辰夫様御出の事、紳六郎と、もに、小学校に御かよひの事」(三月三日条)とある(川崎勝「西升子日記」幕末維新期の女性の日記『南山経済研究』第一四巻第一・二号、一九九九年)。浅野辰夫(辰之助)は、慎思郎の周旋により沼津兵学校附属小学校に入り、西の養子紳六郎とともに通学したのである。安政三年(一八五六)五月一二日の生まれなので、この時一三歳。その後、辰夫は明治四年(一八七一)徳川家の資金でアメリカへ留学し、イーストマン商業学校を卒業した。ニューヨークで撮影された静岡藩の留学生、浅野・竹村謹吾・大久保三郎・川村清雄ら四名の集合写真も現存する(『維新の洋画家川村清雄』)。帰国後は工部省工作局五等属を経て、第一銀行の帳面方や各地の中学校で教員をつとめた。明治二八年(一八九五)からは暫く麻布中学校で英語を教えていたこともあったし(『麻布学園の一〇〇年』第一巻)、大正期には奈良県十津川の私立中学文武館に在職していた。『教育百科問答 第一編 算術之部』(一八九九年刊、原成美訳、丸善書店他)という校閲を担当した書籍もある。しかし、「若殿様上りの学校出」なので、うまく世渡りができなかったらしく、生活困窮により多額の負債を抱え、明治三十年代に佐々木勇之助に対し経済的援助を求めた書簡が少なからず残る。辰夫は昭和十一年(一九三六)三月一三日、東京で没した。

辰夫の父浅野氏祐は、駿河府中藩中老、静岡藩権大参事・政事庁掛(藩庁掛)をつとめ、廃藩後、明治五年七月まで静岡県参事の任にあったが、その後上京、東京日本橋の新大坂町で雑貨商を営んだが失敗し、明治二三年(一八九〇)からは千駄ヶ谷の公

爵徳川家達家の家令をつとめて世を終えた(『故浅野美作守履歴』『旧幕府』第四巻第七号)。やはり佐々木家が経済的支援を行ったこともあったという(佐々木勇之助「昭和八年十月八日起稿」)。

辰夫の弟浅野乾(雉次郎)は、明治九年(一八七六)六月二十八日、一八歳の時、慶応義塾に入学しているが、その際は佐々木慎思郎が証人になっている(『慶応義塾入社帳』第二巻、一九八六年)。『伊勢新聞』『甲府日日新聞』の記者を経て、『朝野新聞』に入り、『絵入朝野新聞』の主宰者となった。後に『東京絵入新聞』『関西日報』に転じた(『明治新聞雑誌関係者略伝』、一九八五年、みず書房)。自由党に入り自由民権運動に参加、嚶鳴社・国友社の社員としても『明治民権家合鏡』(一八八〇年)、『演説者一覽』(一八八二年)といった演説家の番付に名前が載った。「筆力縦横」「能弁ニアラスト雖モ能ク衆ニ通ス」「鋭敏多才ナリト雖モ肝小ナルハ惜ムヘキコトナリ」と評された(大井通明『日本全国新聞記者評判記 附列論』、一八八一年)。明治二十四年(一八九一)一二月一五日落(宝祥寺過去帳)。



明治39年(1906)  
佐々木勇之助宛浅野辰夫借用証  
佐々木恭之助氏寄贈

(樋口雄彦)

## 博物館実習と館外展示の報告

当館では、学芸員資格の取得を目指す大学生・院生を、実習生として受け入れています。今年度も8月19日(火)～9月2日(火)の期間、3人の学生が実習を行いました。ぬましんストリートギャラリーでの館蔵資料展「べらぼうの時代の沼津の文化」の企画から展示までを実習生が中心となって行いました。

### 沼津市明治史料館通信

第163号

令和7年10月31日

編集・発行 沼津市明治史料館

〒410-0051 沼津市西熊堂372-1

TEL 055-923-3335

FAX 055-925-3018

印刷 みどり美術印刷株式会社



▲資料の取扱いの実習



▲展示作業のようす